

# 「又」の漢字系統樹（1 / 3）

善如寺 俊幸

(2007. 10. 31 受)

【キーワード】 漢字系統樹、系統、又

## 1 はじめに

「漢字系統樹 2200」から、その字源が人の手に由来する漢字群で「又」を核とする漢字系統樹を提示する。ただ、本稿では、紙面の都合上、「又」を核とする漢字系統樹のうち、1 / 3 相当の、「又」「右」「𠄎」「𠄎」「蚤」「支」「𠄎」「𠄎」「𠄎（𠄎）」「段」「𠄎」「𠄎」の系統を提示し、各々を字源論的に検証する。「漢字系統樹」については、既に述べている<sup>(注1)</sup>ので、ここでは説明を省くが、本稿の漢字系統樹がこれまで同様に常用漢字の字数枠を目安として編まれていること、字形の確認には主に『甲骨金文辞典』、『広漢和辞典』、『字通』、『説文解字・段注本』、『金文常用字典』が用いられたことをここでも確認しておきたい。

## 2 「又」の系統樹解字

### 2-1) 又・友

又は右手の象形字で、手あるいは右手の意味である。右の初文で、これに祝祷を収めたサイ（𠄎）を加えた右は後起の字である。甲骨文も金文も篆文（資料1）も同じく右手を象った字形である。祝祷を収めた器を持って右、右手を重ねて友、対称的に象った左手と呪具の工で左、祝祷の器と呪具を手を持って舞い、神の所在を尋ねる神降ろしの儀が尋である。<sup>(注2)</sup> [説文解字注（段注）] 三篇下十六に「手也。象形。三指者、手之列多略不過三也。凡又之屬皆从又。」とある。パーツとして上下を挿まれる時、あるいは縦に交わる一画がある時は𠄎の形になる。「雪」は字源を異にする字である。

友は又と又の会意字で、手を取り合って助け合う意味である。篆文は又を上下に重ねるのに対し、甲骨文も金文も又の並立する双の字形<sup>(資料2)</sup>である。甲骨文、金文ともに左手の𠄎 並立形も数例あるが、ほとんど右手である又の並立形である。また金文には下に日を加えたもの<sup>(資料3)</sup>も多く、この𠄎は（クリスチャンが聖書の上

に手を置いて宣誓するように) 祝祷を収めた器である日の上に双方の手を置いて同族の盟誓を行うことを表し、金文では同族の兄弟を朋督と記すらしい。<sup>(注3)</sup>とするなら、友とは同族の盟誓を交わした者の友誼をいうのが原義ということになる。[説文解字真本] 三下八には「同志爲友从二双相交友也」とのみある。

又はこの漢字群の核となる第1系統、友はそれに連なる第3系統の字である。有も無論同系であるが、肉の項に分類する。

## 2-2) 右

右は又と口との会意字で、神降ろしの神楽で舞う際、祝詞を収める祝祷の器を持つ右手を表す。<sup>(注4)</sup> 字義は、みぎ。甲骨文では又のみで口が加わるのは金文以降である。<sup>(資料4)</sup> [説文解字真本] 三下六には「手口相助也从又从口」、二上九にも重複して「助也从又从口」、[説文解字注(段注)] 二篇上二十一、三篇下十六ともに「助也从又口」と、何れも手では不足だから口で補助するとしている。口を祭事に係わる祭具とする字解は白川に始まる。

右を又の第2系統に配する。この第3系統には祐や佑があるが、ここでは省く。

## 2-3) 又

又は両手の指を組んで右手指の間に爪の覗いた象形字である。<sup>(注5)</sup> 指を組む、交わる、はさみとる、等の字義がある。[説文解字注(段注)] に倣って、指の間に物をはさんだ象形<sup>(注6)</sup> とする字解もあるが、字義に照らしても、あるいは又との関連を考えても合理的ではない。「はさみとる」の字義も、指の間にはさんで取るというのではなく、指先の爪を使ってはさみ取ると考えるのが自然である。右手指間の一爪を描いて又、二爪を象ったのが又である。[説文解字真本] 三下七には「手指相錯也从又象又之形」、[説文解字注(段注)] 三篇下十七には「手措相錯也。从又一。象又之形。」とした後に更に「謂手指與物相錯也。」とある。

又の第2系統に又、そこから更に同じ第2系統の又へと繋がる。

## 2-4) 又

又は両手を組んで右手(又)の指の間に二爪の覗く象形字である。字義は、つめ。獲物を掴む時の鳥獣のつめを表す爪に対して、又は人の手のつめを表す。<sup>(注7)</sup> 爪の二様の金文字形<sup>(資料5)</sup> にその原義が分かりやすい。[説文解字注(段注)] 三篇下十七には「手足甲也。从又。象又形。」とあり、更に「又爪古今字。古作又。今用爪。」

と注釈する。

指間の一爪の又、二爪の又を第2系統に配し、更に蚤へと広げる。

## 2-5) 蚤騷搔

蚤は又を音符とする形声字で、字義は、のみ、である。字音から早や爪の意味に通用されることもある。[説文解字真本]に蚤の字形で収録されており、それが正字である。蚤は別体、略字である。蚤と手を合わせて搔、馬と連想させると騷になる。

[説文解字注(段注)]十三篇下一には「齧人跳蟲也。从虺。又聲。又、古爪字。蚤蚤或从虫。」とある。

騷の旧字は騷で、蚤が音符の形声字である。字義は、さわぐ。[説文解字真本]十上四には「擾也一曰摩馬从馬蚤聲」、[説文解字注(段注)]十篇上十五には「摩馬也。从馬。蚤聲。」とあるが、搔よりむしろ癢との連想であろう。

搔は蚤を音符とする形声字で、字義は、爪で搔く、かきむしる。[説文解字注(段注)]十二篇上三十六には「刮也。从手。蚤聲。」とある。

又の第2系統、又より分岐した同じ第2系統に蚤、その第3系統に騷、搔を分類する。

## 2-6) 支枝伎肢岐妓翅伎

支は木の小枝を表す十と又の会意字で、手に持った小枝を表す。字義は、木の枝、わかれる、ささえる。枝の初文とされる。[説文解字真本]三下八、[説文解字注(段注)]三篇下二十一に「去竹之枝也。从手持半竹。凡支之屬皆从支。」とするのは篆文字形によるもので、金文字形では竹とする根拠はない(資料6)。

枝は支が音符の形声字で、木のえだ、の意味があり、支と通用することも多い。支は初文で、肉と組み合わせると、肢体の肢となる。[説文解字真本]六上六には「木別生條也从木支聲」とある。

伎は支を音符とする形声字で、字義は、わざ、たくみ。[説文解字真本]十二上十四には「巧也从手支聲」とあり、伎は主に手技をいい、歌舞などに優れた身体の巧み、技巧を伎という。

肢は支を音符とする形声字で、手足、四肢、の字義がある。枝が木の枝をいうのに対し、肢体の肢をいう。[説文解字真本]四下九には肢を正字として「體四肢也从肉只聲」、肢を「肢或从支」とするが、白川(注8)は[淮南子、脩務訓]の「四肢不動思慮不用」以外に用例が見られないこと、許慎が[淮南子]の注釈を試みている

こと、只の系列の字に分岐の字義はないこと等を論拠に疑問を呈し、只は四の誤写である可能性を指摘する。只は允などと同様、祝祷を収める器に神気の現れる様を表した字で、字義は、ただひたすら、詩句の終助詞に仮借する用法があるらしい<sup>(注9)</sup>が、分岐の意味とは結びつかず、やはり、四肢という時の連想から四であったのかも知れない。

岐は支が音符の形声字で、山中の分かれ道を表す。分かれ道、分かれる、の字義がある。[説文解字真本] 六下十には郊を正字とし「周文王所封在右扶風美陽中水郷从邑支聲」、岐を「郊或从山支聲因岐山以名之也」と、地名を由来とするが、[説文解字注(段注)] 六篇下二十六には更に「經典有岐無郊」と注釈するし、岐山の地名にも郊が用いられたものはない<sup>(注10)</sup>という。

妓は支が音符の形声字で、歌舞の技に長けた女を意味し、うたひめ、まいひめ、あそびめ、の字義がある。妓女の歴史は古く、既に戦国の世には妓家が栄えていた<sup>(注11)</sup>らしい。しなやかに傾頭して巧みに舞い、「歌舞く」意味の伎に近似する字である。

又の第2系統、支から第3系統の枝、技、肢、岐、妓などへと繋がる。他にも翅、伎などが同系である。

## 2-7) 𠄎投役設殺疫股殷

𠄎は、九と又の会意字である。九は、甲骨文では羽飾りをつけた杖矛(𠄎杖)、金文では鉞を表し、<sup>(資料7)</sup> 𠄎はそれを手に持ち打ち下ろす意味である。[説文解字真本] 三下十一には「以𠄎殊人也禮𠄎以積竹八觚長丈二尺建於兵車旅賁以先驅从又九聲凡𠄎之屬皆从𠄎」、𠄎は「軍中士所持𠄎也」、[説文解字注(段注)] 三篇下二十四には「𠄎杖殊人也。周禮。𠄎以積竹。八觚。長丈二尺。建於兵車。旅賁以先驅。从又。九聲。凡𠄎之屬皆从𠄎。」に注釈で「杖各本作𠄎。依太平御覽正。云杖者、𠄎用積竹而無刃。」とある。𠄎に手と合わせると、呪杖を手に持ち邪霊を打ち祓い投棄する儀礼行為を示す投となり、彳とでは兵役につき辺地へ行く防人の意味の役、獸を打ってかけられた呪詛を相殺する儀礼行為から死殺の意味が加わるのが殺、儀礼の場を設営するのが設といった具合である。

投は手と𠄎の会意字で、なげる、すてる、の字義がある。[説文解字真本] 十二上十一には「擲也从手从𠄎」、擲は「搔也从手適聲一曰投也」とあり、呪飾の羽飾りをつけた杖である𠄎で打(擲)ち、邪霊を祓い投棄する行為を意味する。<sup>(注12)</sup>

役は彳と𠄎の会意字で、防人として辺地に赴く意味である。字義は、防人、労役、など。[説文解字真本] 三下十一には「戍邊也从𠄎从彳」、[説文解字注(段注)] 三

篇下二十七には「戍也。从戍彳。」、注に「戍、守邊也。」とあり、古文字形を役とする。職務一般に用いるのは後起の用法である。

設は言と彳の会意字で、誓約や祈禱を表す言に衤を示す彳を合わせて、祭祀儀礼の場を設営する意味であろうという。<sup>(注13)</sup> [説文解字真本] 三上七には「施陳也从言从彳彳使人也」とあるが、甲骨文にも金文にもなく、初義の確認は困難である。

殺は甲骨文、金文<sup>(資料8)</sup>では崇、蔡と同字形で、かつては同字であったと考えられる。それは呪霊をもち崇をなす獣の象形で、甲骨文の字形から長毛の獣とされる。それに会意的に彳が加わり殺の字形になるのは古文以降である。呪獣を打ち、かけられた呪詛を衤減殺し相殺するのが原義で、拡大して死殺の義に用いるのは後起の用法である。<sup>(注14)</sup> 殺は篆文字形を写した古字で、斂は俗字。白川は殺の左半は彳で、崇の初文とし、彳の甲骨文に殺と同字形のものを収める<sup>(注15)</sup> が、他の資料<sup>(資料9)</sup>では甲骨文、金文ともに異なる。また、[説文解字真本] 九下十三、[説文解字注(段注)] 九篇下三十八にある彳の籀文および古文字形も、一上四、一篇上十六にある崇のそれとは異なるが、[説文解字真本] 三下十二、[説文解字注(段注)] 三篇下二十八に収められる殺の古文には極めて近似的な字形が見られ、白川説の論拠の一つになっている。殺の項には「戮也从彳杀聲凡殺之屬皆从殺」とし、古文字形を4例、籀文字形を1例収める。戮とは刑により殺す意味である。

疫は役の略、彳を音符とする形声字で、疫病、伝染病の意味である。古い時代には疫病神(疫鬼)によってもたらされるものと考えられた。これを修祓除疫する鬼やらいが讎で、鬼を追逐する声か讎声、太鼓が讎鼓である。[説文解字注(段注)] 七篇下三十四には「民皆疾也。从疒役省聲。」とある。

股は彳を音符とする形声字であるが、彳を鼓の略とする説<sup>(注16)</sup>と殺の略とする説<sup>(注17)</sup>がある。前者は甲骨文では専ら設の字形<sup>(資料10)</sup>が用いられていた鼓の略とする考えで、胯に通じるといふが、字義的には連関が希薄である。後者にいう殺は[説文解字注(段注)] 四篇上三十四に「夏羊牡曰殺。从羊。彳聲。」とあり、黒羊の牡をいう。白川はこれを羯と同義とするが、羯は[説文解字注(段注)] 四篇上三十四に「羊殺犗也。从羊。曷聲。」とあり、羊の去勢を意味する。つまり、殺は羊の股間を打って割勢する(北欧ラップランドにトナカイを遊牧する民サーミ人のトナカイの去勢法に類似している)意味であるというものであるが、[広漢和辞典] 下巻257頁にも「殺、亦羯也」の一文を引いて去勢した羊としている。こうしてみると、股の彳は殺と考えて間違いはないだろうと思われる。股は[説文解字注(段注)] 四篇下二十六に「髀也。从肉。彳聲。」、四篇下十五には髀を「股外也。从骨。卑聲。」、注

積に「各本無外」とあり、もも、股、の意味である。

股は身の反文である月と夂の会意字で、妊婦を夂で殴打する呪儀を表す。さかん、ゆたか、赤黒い色、殷王朝、の字義がある。〔説文解字真本〕八上十四に「作樂之盛稱股从月夂易曰股薦之上帝」、月を「歸也从反身凡月之屬皆从月」とあるが、金文字形<sup>(資料11)</sup>は明らかに身の反文と夂で、あえて妊婦のお腹を殴打する形になっている。また、〔広漢和辞典〕中巻732頁に夂を強制する意味とし、股を身ごもらせ大きくさせる様を表すとするが、夂は杖矛で殴打する意味である。白川<sup>(注18)</sup>は股の原義は殷紅、朱殷という時の赤い血の色であろうとし、金文字形に散見される寢は廟中で妊婦を打つ呪儀が行われたことを示しているという。その呪儀の意味するところはよく分かっていないが、魂振りの意味があったらしい。殷は、王朝の正式な国号の商が自称であったのに対し、周の用いた蔑称だろうとも言われる。

又の第2系統、夂から第3系統に投、役、設、殺、疫、股、殷などが繋がる。殷は更に髀に繋がる第2系統として分類しても良いが、ここでは字数枠を考慮して第3系統に配する。また、殷も夂より分岐する同系で、更に澱、臀へと連なるが、より支配的なパーツである尸の項に分類する。

## 2-8) 毆擊繫

毆は更と夂の会意字で、囊の口を括って、それを打（撃）ち、中に入れた物の殻をとること、例えば囊中に穀類を入れ、それを打って脱穀すること等を表している。字義は、うつ、うちはらう。害は車軸の先端（車轂：こしき）の意味で、車争いの競技で車が接し合い車軸の車止めの楔（車轄）がぶつかり合うことをいうとする字解<sup>(注19)</sup>もあるが、害は甲骨文<sup>(資料12)</sup>を見れば明らかに恵<sup>(資料13)</sup>で車<sup>(資料14)</sup>ではないことが瞭然とする。〔説文解字真本〕三下十一にも「相擊中也如車相擊故从夂从害」とあるが、それはむしろ、十四上十四に「車轄相擊也从車从毆亦聲」とある繫に該当することである。篆文の害は更の誤りで、常用漢字の撃に車の字形を用いたのはその誤りを受け継いだものとされる。毆は撃の初文で、害は本来、𠄎と書かれるべき字である。<sup>(注20)</sup>

撃の旧字は撃で毆が音符の形声字である。字義は、うつ、たたく。篆文字形は撃となっており、〔説文解字注（段注）〕十二篇上五十二には「支也。从手。毆聲。」とある。

繫は毆が音符の形声字で、字義は、つなぐ。篆文字形は繫で、〔説文解字真本〕十三上八には「繫緦也一日惡袪从糸毆聲」、緦を「繫緦也一日維也从糸尻聲」、〔説文解

字注〔段注〕十三篇上三十三には「繫紼也。一曰惡絮。从糸。𣪠聲。」、紼を「繫紼也。从糸。尻聲。一曰維也。」とある。

𣪠を又の第2系統、又から分岐する同じ第2系統に配すれば、そこから第3系統の撃、繫に連鎖する系統樹ができる。

## 2-9) 𣪠 (𣪠) 穀

𣪠は本字、𣪠に几を加えた俗字、穀の省略体である。𣪠はもみがらの象形で初文である𣪠に又を加えた会意字で、もみを打ち脱穀した後のもみがらを表す。字義は、もみがら、中空の外殻。〔説文解字真本〕三下十一には「从上撃下也一曰素也从𣪠𣪠聲」、〔説文解字注〔段注〕〕三篇下二十五には「従上撃下也。从𣪠。𣪠聲。一曰素也。」と形声字とする。

穀の旧字は穀で、𣪠が音符の形声字である。字義は、こくもつ。字は穀物の穂を打って脱穀する様子を示している。〔説文解字注〔段注〕〕七篇上五十に「續也。百穀之總名也。从禾。𣪠聲。」とあるが、穀と續の音義を連関させるのは音義説による<sup>(注21)</sup> という。

𣪠 (穀) を第2系統の又から分岐する第2系統に配すると、その第3系統は穀となる。

## 2-10) 段鍛

段は段石の形と又の会意字で、段石を打って鍛冶することを表す。鍛の初文である。字義は、だん、打って段々にする。金文字形の一例<sup>(資料15)</sup>をもって左半を厓と字解するもの<sup>(注22)</sup>もあるが、他の金文<sup>(資料16)</sup>から厂とは明らかに異なると分かる。しかも聖域であることの多い厓に杖矛で段をつけるというのは不自然である。〔説文解字真本〕三下十一には「椎物也从𣪠𣪠省聲」とある。

鍛は段を音符とする形声字で、鍛冶のことを意味する。字義は、打ち鍛える。〔説文解字真本〕十四上二には「小冶也从金段聲」とある。

又より分岐した第2系統に段、その第3系統に鍛を配する。

## 2-11) 𣪠没殍

𣪠は、うつぶせに臥した水死者を表す𣪠と又の会意字とする字解<sup>(注23)</sup>と、篆文および古文字形から水の回流する象形の回(回)と又の会意字であるという字解<sup>(注24)</sup>がある。いずれも水没という字義では一致するが、前者は水没者に手を加えた形、

後者は回流する水に手を沈め物を取り出す意味と字解する。後者は、回流に手を入れて物を取り出して水没の意味になるというのはいかにも不自然で、むしろ、手で物を沈める時の回流を描いた字と解するのが自然である。𠂔の金文字形<sup>(資料17)</sup>は明らかに回のそれ<sup>(資料18)</sup>とは異なるが、𠂔の金文資料がなく𠂔との照合が困難なため、篆文・古文字形を基に物を沈める回流を表すと字解しておく。[説文解字真本]三下七には「入水有所取也从又扌回下回古文回淵水也讀若沫」、[説文解字注(段注)]三篇下十九には「入水有所取也。从又在回下。回古文回。回淵水也。讀若沫。」とある。

没の旧字は沒で、𠂔が音符の形声字である。水没を意味し、𠂔が初文とされる。[説文解字真本]十一上十三には「沈也从水从𠂔」、[説文解字注(段注)]十一篇上二の二十三には「湛也。从水。𠂔聲。」とあるが、湛は深く沈む意味、会意字ではなく形声字とするのが正しい。水没死が歿である。

歿は𠂔を音符とする形声字で、水没死を意味する。字義は、しぬ、おわる。[説文解字真本]四下四には歿を「物或从𠂔」とし、意味を「終也」とするが、白川の指摘する<sup>(注25)</sup>ように、字義に忠実なのは歿のほうである。

𠂔は又の第2系統、その第3系統は没、歿となる。

## 2-12) 段 假 暇

段は[広漢和辞典]上巻502頁に、岩石(厂)と未加工の玉(二)と両手の会意字で、岩石から取り出した玉の原石を表し、琢磨して真玉となる前の假の玉をいい、疵を示す瑕の初文(初体字)という。金文<sup>(資料19)</sup>を見ると、「いたる」と訓ぜられる遐<sup>(資料20)</sup>とは同形、段<sup>(資料21)</sup>とは手に取る道具の類がやや異なるものの左半部はほぼ同形と見えるし、[説文古籀補]より収録した字形<sup>(資料22)</sup>においては同形と見て良い。それ故、白川<sup>(注26)</sup>は、段にも言及し、鉞物を鍛冶するのが段で、琢冶する玉塊が段であろうという。𠂔に「さいわい」、𠂔に「きず」、𠂔に「鍛冶する」の字義が生じたのも、玉石を求め原石を切り出し採取するという段の本義を知れば、その字義的連関が容易に連想され得るのである。[説文解字真本]三下八には「借也闕」とのみ記されている。

假の旧字は假で、段を音符とする形声字である。字義はかりの、一時的に代わる、かりる、かす。假は俗字として用いられていた字形である。[説文解字真本]八上六に假を「非真也从人段聲」「一日至也虞書曰假于上下」というが、そもそもは神事に用いる仮面を意味したものらしい。仮面を着けて真物に代わり、神霊の靈力を借り



る意味などが発生してくる。(注27)

暇は段が音符の形声字で、字義は、ひま。一時的な仮の時を意味する。[説文解字真本] 七上三に「閑也从日段聲」とある。

霞は段が音符の形声字で、字義は、あさやけ、ゆうやけ。日本では専ら、かすみの字義で用いられるが、[広漢和辞典] 下巻1171頁に[説文新附]を引用していうように、「霞、赤雲气也。从雨段聲。」と赤くたなびく霧状のものをいう。

又の第2系統に段、その第3系統に仮、暇、霞を分類する。先に挙げた瑕、遐、蝦、瘦、鍛の他に蝦、鰕などこの系統の字は多いが、ここでは省く。

### 3 おわりに

以上の「又」を核とする漢字系統樹をまとめると、以下の通り、同系漢字群の整然とした体系が鳥瞰できる。

#### I II III (系統)

又 友

右

又

又

蚤騒搔

支枝技肢岐妓翅伎

爻投役設殺疫股殷

毆擊繫

毆(殼) 穀

段鍛

夕没歿

段假暇霞

#### 注釈






(注1) 「目」の漢字系統樹(東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第32号)、「人」の漢字系統樹1/2(同第33号)等を参照。




















(注2) [文字逍遥] 173, 174頁、[新訂字統] 863, 864頁、[字通] 1535, 1536頁

(注3) [新訂字統] 863頁

- (注4) [文字逍遥] 8, 173, 174 頁、[漢字百話] 38 頁、[新訂字統] 864 頁、[字通] 1536 頁
- (注5) [新訂字統] 343 頁、[字通] 574 頁
- (注6) [広漢和辞典] 上卷 488 頁
- (注7) [新訂字統] 557 頁
- (注8) [字通] 650 頁
- (注9) [新訂字統] 374 頁
- (注10) [新訂字統] 145 頁
- (注11) [新訂字統] 167 頁
- (注12) [新訂字統] 665 頁、[字通] 1193 頁
- (注13) [字通] 934 頁、[新訂字統] 530 頁
- (注14) [漢字百話] 55 頁、[新訂字統] 362 頁、[字通] 611 頁
- (注15) [新訂字統] 636 頁
- (注16) [広漢和辞典] 中卷 479 頁
- (注17) [新訂字統] 286 頁、[字通] 466 頁
- (注18) [漢字百話] 56, 105 頁、[字通] 42 頁、[新訂字統] 33 頁
- (注19) [広漢和辞典] 中卷 737 頁、書：下卷 823 頁
- (注20) [新訂字統] 256 頁
- (注21) [字通] 559 頁
- (注22) [広漢和辞典] 中卷 731 頁
- (注23) [新訂字統] 837 頁 [字通] 1485 頁
- (注24) [広漢和辞典] 上卷 496 頁、[説文解字真本] 三下七
- (注25) [新訂字統] 837 頁
- (注26) [新訂字統] 76 頁
- (注27) [新訂字統] 73 頁

## 資料

- (資料1)  [甲骨金文辭典] 一九三頁 340
- (資料2)  [甲骨金文辭典] 一九七頁 346
- (資料3)  [甲骨金文辭典] 一九七頁 346
- (資料4)  [甲骨金文辭典] 二〇九頁 368
- (資料5)  [甲骨金文辭典] 八一九頁 1510

- (資料6)  [甲骨金文辭典] 五六五頁 1040
- (資料7)  [甲骨金文辭典] 七一三頁 1310
- (資料8)  [甲骨金文辭典] 七一五頁 1314、  
 崇 [甲骨金文辭典] 九四五頁 1739、  
 蔡 [甲骨金文辭典] 一一三一頁 2071
- (資料9)  [甲骨金文辭典] 四七七頁 867、[広漢和辞典] 上巻 1258 頁
- (資料10)  [甲骨金文辭典] 一五一九頁 2807
- (資料11)  [甲骨金文辭典] 七一五頁 1312
- (資料12)  [甲骨金文辭典] 一二六九頁 2333
- (資料13)  [甲骨金文辭典] 五一五頁 939
- (資料14)  [甲骨金文辭典] 一二六七頁 2330-2
- (資料15)  [甲骨金文辭典] 七一五頁 1311
- (資料16)  [甲骨金文辭典] 七一五頁 1311
- (資料17)  [甲骨金文辭典] 七三九頁 1357
- (資料18)  [甲骨金文辭典] 二五三頁 452
- (資料19)  [甲骨金文辭典] 二〇一頁 352
- (資料20)  [甲骨金文辭典] 四八九頁 888
- (資料21)  [甲骨金文辭典] 七一五頁 1311
- (資料22)  [甲骨金文辭典] 二〇一頁 352

## 参考文献

- 阿辻哲次 1994 『漢字の字源』：講談社現代新書
- 阿辻哲次 1989 『漢字の歴史』：大修館書店
- 阿辻哲次 2001 『漢字道楽』：講談社選書
- 尾崎雄二郎編 1993 『訓読説文解字注』：東海大学出版会
- 白川静 1987 『文字逍遥』：平凡社
- 白川静 1996 『字通』：平凡社
- 白川静 1979/99 『中国古代の文化』：講談社学術文庫
- 白川静 1980/99 『中国古代の民俗』：講談社学術文庫
- 白川静 (2000) 『漢字』 岩波新書
- 白川静 1978/2000 『漢字百話』：中公新書
- 白川静 1994/97 『字統』 平凡社

- 白川静 2004 『新訂字統』 平凡社
- 白川静 1995 『字訓』 平凡社
- 白川静 2001 『白川静著作集2 漢字Ⅱ』 平凡社
- 白川静 2000 『白川静著作集3 漢字Ⅲ』 平凡社
- 白川静 2001 『白川静著作集4 甲骨文と殷史』 平凡社
- 白川静 2001 『白川静著作集5 金文と經典』 平凡社
- 善如寺俊幸 (2003) 「日」の漢字系統樹 『東京外国語大学留学生日本語センター論集第29号』
- 善如寺俊幸 (2004) 「佳」の漢字系統樹 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第30号』
- 善如寺俊幸 (2005) 「木」の漢字系統樹 『(香港 第6回国際日本研究・日本語教育シンポジウム論文集) 日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク 1 日本研究と日本語教育研究』 香港城市大学語文学部・香港日本語教育研究会
- 善如寺俊幸 (2005) 「卍」の漢字系統樹 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第31号』
- 善如寺俊幸 (2006) 「人」の漢字系統樹 1 / 2 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第32号』
- 陳舜臣 1999(1991初) 『中国の歴史』 講談社文庫
- 藤堂明保 1965 『漢字語源辞典』: 学燈社
- 水上静夫 1995 『甲骨金文辞典』: 雄山閣
- 水上静夫 1998 『漢字誕生—古体漢字の基礎知識』: 雄山閣
- 諸橋轍次他 1982 『広漢和辞典』: 大修館書店
- 山田俊雄他 1992 『大字源』: 角川書店
- 日外アソシエーツ編集部 1994 『漢字異体字典』: 日外アソシエーツ  
特集・甲骨文字の世界 『月刊しにか』 4月号 1999 Vol.10/No.4: 大修館書店
- 段玉裁 『説文解字注』 1993年版: 上海古籍出版社
- 許慎 『説文解字真本』 中華民國75年版: 台湾中華書局
- 陳初生 『金文常用字典』 2004年: 陝西人民出版社
- Bernhard Karlgren (岩村忍・魚返善雄訳) 1999 『支那言語学概論』 ゆまに書房

# Systematic Kanji Tree " 又 " ( 1 / 3 )

ZENNYOJI, Toshiyuki

Returning to the roots of each Kanji and thinking about how the meaning of each part came into being, I wove the Systematic Kanji Tree 2200. At this time, I would like to present the following "又" group of this Systematic Kanji Tree 2200, and explain my intentions and reasons for certain aspects of its design.

I II III (系統)

又・友

右

又

又

蚤騒搔

支枝技肢岐妓

又投役設殺疫股殷

毆擊繫

殼穀

段鍛

爻没歿

段仮暇霞